

氏名	赤木 真弓
学位の種類	博士 (心理学)
報告番号	甲第545号
学位授与年月日	2020年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与える影響 —量的・質的アプローチ—
審査委員	(主査) 大野 久 浅野 倫子 佐藤 有耕 (筑波大学大学院 人間総合科学研究科 教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

本論文は、本文 158 頁（A 4 判・ワープロ打ち；約 189,6000 字）からなる。構成は、下記記載のとおりである。

#### 第 1 章 序論

1. 本研究の背景
2. 母娘関係についての研究
  - 1) 親子関係
  - 2) 母娘関係
  - 3) 母娘関係の類型化
3. アイデンティティ研究の手法
  - 1) 質問紙調査
  - 2) 面接法
  - 3) 伝記研究法
  - 4) 体系的折衷調査法
4. 本研究の目的
5. 研究の構成と内容

#### 第 2 章 母娘関係尺度の作成とクラスター分析による母娘関係分類

1. 問題と目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察
5. 今後の課題

#### 第 3 章 伝記分析：マーガレット・ミッチェル

1. 問題・目的
2. 方法
3. 結果・考察
4. 総合考察
5. 今後の課題

#### 第 4 章 伝記分析：アガサ・クリステイー I

1. 問題・目的
2. 方法
3. 結果・考察

- 4. 総合考察
- 5. 今後の課題
- 第5章 伝記分析：アガサ・クリスティー II
  - 1. 問題・目的
  - 2. 方法
  - 3. 結果・考察
  - 4. 総合考察
  - 5. 今後の課題
- 第6章 新たな体系的折衷調査法構築の試み
  - 1. 問題と目的
  - 2. 方法
  - 3. 結果
  - 4. 考察
  - 5. 今後の課題
- 第7章 比較分析：M・ミッチェル& A・クリスティー
  - 1. 問題・目的
  - 2. 方法
  - 3. 結果と考察
  - 4. 総合考察
  - 5. 今後の課題
- 第8章 全体総括
  - 1. 本研究結果の総括
  - 2. 本研究の成果
    - 1) 母娘関係を測定する尺度の開発と母娘関係の類型化
    - 2) 質問紙調査と伝記研究法による相互補完による分析
    - 3) 質問紙調査と伝記研究法を組み合わせた方法論の確立
    - 4) 漸成発達理論の対概念における否定的感覚の必要性についての検証
  - 3. 今後の課題と可能性

引用文献

謝辞

付録

## (2) 論文内容の要旨

### 第1章

青年期の自立という視点から親子関係研究の歴史について概観したうえで、親子関係の中でも特に繋がりが深いとされる母娘のアンビバレンツで複雑な関係性に焦点をあてた。さらに、母娘関係を類型化して検証した研究について、その意義と限界について述べた。次に、アイデンティティ研究の手法に着目し、量的研究、質的研究、それぞれの手法の長所、短所について概観した。

### 第2章

大学生の女子を対象とした質問紙調査を実施した。母親と娘の関係性を多角的に検証するための尺度を作成し、その下位尺度を用いてクラスター分析を行った結果、「反発群」「親密群」「自立群」「葛藤従属群」に類型化された。得られた類型について、分離と結合、および精神的健康の視点で分析した結果、「自立群」が健康な分離タイプ、「反発群」が不健康な分離タイプ、「親密群」が健康な結合タイプ、「葛藤従属群」が不健康な結合タイプとなった。さらに、アイデンティティ達成が高かったのは「親密群」と「自立群」で、どちらも母からの押し付け、母への劣等感が低かった。逆に、アイデンティティ達成が低かったのは「反発群」と「葛藤従属群」で、どちらも母からの押し付け、母への劣等感が高かった。以上のことから、娘のアイデンティティ形成および精神的健康にとって重要なのは、母親との分離か結合か、ということではなく、母からの押し付けや母への劣等感を感じない母娘関係であることをあきらかにした。

### 第3章

フォークロージャーからアイデンティティ拡散にアイデンティティ・ステータスに変化した事例として作家、マーガレット・ミッチェルの伝記分析を行い、その要因を、母娘関係の特徴から検証した。第2章における母娘関係の分類で、不健康な結合タイプである「葛藤従属群」に該当すると推測されるミッチェルについて検証した結果、葛藤従属型の母娘関係にある娘は、母に否定されること、見捨てられることを恐れる「閉鎖型フォークロージャー」(Archer & Waterman, 1990)になる可能性があること、アイデンティティ形成において、自らの主体性よりも母の意志に依存するため、葛藤を内在化させ、目標そのものではなく、母の意志に従う傾向があること、したがって、母の監視下ではフォークロージャーとしての目標に固執するが、母の監視がなくなると、目標を放棄して拡散に退行する可能性があること、さらには、青年期まで自らのアイデンティティについて母に依存し、目標を主体的に選択してこなかった場合、依存対象を失った後、新たな目標を主体的に模索し、選択することができない

可能性があることを示した。ここでは、量的研究で分類した「葛藤従属群」の典型としてミッチェルの事例分析をすることで、量的アプローチと質的アプローチを連携させ、「葛藤従属群」について量的質的両面から理解を深めた。

#### 第4章

親密で仲のよい母娘関係が娘の健康的な発達に寄与する面に着目し、母親との親密な関係によって、青年期に健康的なアイデンティティを獲得していったと考えられる作家のアガサ・クリスティーの伝記分析を行った。その結果以下のようなことが明らかとなった。常に自分の味方であると思わせてくれるような母親の無条件の愛情は、娘の「基本的信頼感」を高めること。また、どんなことに対してでも娘に能力があると信じさせてくれる母親の養育態度は、娘の「有能感」を高めること。そして、そのことは青年期において、自分の将来を信じていることができるアイデンティティの形成を促進する可能性があること、である。また、ロールモデルとしての母を肯定的に評価し、母と親密な関係を持っているクリスティーの母娘関係は、健康的な結合タイプである「親密群」(第2章)の特徴を示している。さらに、彼女の人格的特徴も「親密群」と共通していることから、彼女の母娘関係は「親密群」の典型と解釈された。したがって、「親密群」の典型としてクリスティーの事例分析をすることで、量的アプローチと質的アプローチを連携させ、「親密群」の特徴について量的質的両面から理解を深めた。

#### 第5章

母親との親密な関係をもとに青年期にアイデンティティを形成していったクリスティーについて、初期成人期以降のアイデンティティの様相について伝記分析を行った。クリスティーは青年期までに思い描いていた通りの結婚をし、母と同様に「幸せな妻」というアイデンティティを確立したように思われたのであるが、夫との関係をうまく築くことができなかった。つまり、母親に守られている間は表面化しなかった不健康な人格特性が、母親の支えが得られない状況で、自分の思い通りにいかなくなったときに表面化したと考えられる。その原因として、すべてがうまくいく、自分は愛されている、という「基本的信頼感」が強い一方で、思い通りにいかない、理解されない、という「基本的不信」が低すぎて、他者への共感性が高められなかった可能性があることを示した。さらに、このような人格特性は、娘に「基本的不信」という否定的な方向性を経験させないようにすることによって娘の「基本的信頼感」を高めようとする母親の養育態度によって形成された可能性を考察した。

## 第 6 章

量的分析と質的分析を組み合わせる体系的折衷調査法(大野, 2011)に基づき、質問紙調査と伝記研究法を組み合わせた「伝記資料による定量化分析法」の開発を試みた。具体的には、第 3 章、第 4 章で分析した青年期のミッチェルとクリスティーを対象に、母娘関係尺度(赤木, 2018 第 2 章)の 21 項目について対象者が青年期に回答したと想定して評定し、その結果を、クラスター分析で得られた 4 群と比較して、該当する群を推定した。数値化して検討することで、研究者間が共通の基準を持って議論ができ、蓋然性の検証に有効であることを示した。

## 第 7 章

青年期のミッチェルとクリスティーについて、個別分析による質的検証結果(第 3 章、第 4 章)と、母娘関係尺度を用いて数値化した評定結果(第 6 章)をもとに、アイデンティティの様相とその形成因と考えられる母娘関係について比較分析を行い、母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与える影響について考察した。そこでは、母からの押しつけと母への劣等感によって受動的に従属している母娘関係は、有能感の獲得を阻害するため、その後、青年期のアイデンティティ形成に負の影響を与えること、一方で、母からの押しつけや、母への劣等感を感じず、能動的に従属している母娘関係は、娘の有能感の獲得を促進するため、その後、青年期のアイデンティティ形成に正の影響を与えること、を見出した。

## 第 8 章

本研究における研究知見を総括した。複雑な、母娘関係と娘のアイデンティティの関連について、量的質的両面からのアプローチが有効であることを示した。また、伝記研究法を質問紙調査と組み合わせるための新たな「伝記資料による定量化分析法」の構築を試みたことは、今後、質的研究と量的研究を組み合わせる検証する手法の可能性を示したと考えられる。

## Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文は、心理学の主要なテーマの 1 つである母娘関係に焦点を当て、質問紙調査法の量的データと伝記分析法の質的データの両面からアプローチした研究である。こうした試みは従来の心理学では全く見られなかった研究であり、非常にユニークなものである。

第 1 章においては、青年期の自立という視点から親子関係研究の先行研究を十分レビューし、従来の母娘関係の類型化に関する見解について言及している。さらにこの問題を解明するための方法論として、量的研究、質的研究のそれぞれの長短所について考察している。

第 2 章では女子大学生に質問紙調査を行い、クラスター分析によって、これまでの研究での類型論とは異なる「反発群」「親密群」「自立群」「葛藤従属群」の 4 つのクラスターを見いだした。さらに、この分析の中で娘のアイデンティティ形成および精神的健康にとって重要であるのは、母親との分離か結合か、ということではなく、母からの押し付けや母への劣等感を感じない母娘関係であることを明らかにした。これも従来の研究に新たな知見を加えた分析であるといえる。

続いて第 3 章では、マーガレット・ミッチェルの伝記分析を行い、ミッチェルが、アイデンティティの様相としては「閉鎖型フォークロージャー」であったこと、また母娘関係としては「葛藤従属群」であったことを明らかにしている。伝記による質的資料から娘を「閉鎖型フォークロージャー」に至らしめる「葛藤従属群」の母娘関係の特徴を明らかにしている。

第 4 章では、「親密群」と考えられるアガサ・クリスティーの伝記分析を行い、その母娘関係の特徴を明らかにし、健康的なアイデンティティ形成の要因について明らかにしている。

第 5 章では、青年期まで健康的なアイデンティティ形成ができていたアガサ・クリスティーが中年期以降、夫との人間関係をうまく形成できないプロセスについて、第 4 章で分析した母娘関係の負の側面にその原因を求め検討している。この中で従来まで獲得しない方がよいと考えられていた幼少期の「基本的不信」が健康な人格発達にどのように機能するかについての新たな知見を見いだしている。

第 6 章では、第 2 章で分析した量的なデータからの知見と、第 3 章 4 章 5 章で分析した伝記による質的なデータからの知見を統合し、それぞれの妥当性を検証するため、「伝記資料による定量化分析法」の開発を試みている。この分析

の結果、ミッチェルの青年期までの母娘関係は「葛藤従属群」、クリスティーの母娘関係は「親密群」であることが客観的資料の分析から明らかになった。

さらに第7章においては、第6章の分析の結果をもとにミッチェルとクリスティー母娘関係は青年期のアイデンティティの様相とその形成因と考えられる母娘関係について比較分析を行い、母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与える影響について検証している。その結果、母からの押しつけと母への劣等感が、有能感の獲得を阻害し、青年期のアイデンティティ形成に負の影響を与えることを明らかにしている。

最後に、第8章で本研究を総括した。母娘関係の質が娘のアイデンティティ形成へ与える影響とその要因について明らかにしたこと、そのための方法として、伝記研究法を質問紙調査と組み合わせる新たな「伝記資料による定量化分析法」の構築を検討したことを、本論文の特徴として述べている。

## (2) 論文の評価

本論文の評価は以下のとおりである。第1に、これまで研究が数少なく、また蓄積された研究知見にもあいまいな点が多くなる母娘関係と娘のアイデンティティ形成の関係を解明したことに大きな研究的意義がある。本研究は、現代女子青年の母娘関係を、クラスター分析により「反発群」「親密群」「自立群」「葛藤従属群」の4つの群に類型化している。母と娘との心理的距離の近い関係であっても、「親密群」「葛藤従属群」という両極の特徴を持つ2つの群が存在し、「親密群」は娘の健康なアイデンティティ形成に正の効果を与えるが、「葛藤従属群」は負の効果を与える。また同様に母と娘の心理的距離の遠い「反発群」「自立群」において、「反発群」は娘の健康なアイデンティティ形成に負の効果を与え、「自立群」は娘の健康なアイデンティティ形成に正の効果を与える。以上の研究知見は、説得力のあるものであり、母娘関係を考える上で、健康な自我発達、さらには、臨床的問題の解明などにも有益な知見を提供する可能性が考えられる。

第2に、本論文は、質的データと量的データを体系的折衷する方法として、新たに「伝記資料による定量化分析法」の開発に取り組んだ点が評価できる。昨今、人格心理学や発達心理学などの領域で質的データの重要性が数多く取り上げられる中で、それぞれの弱点である量的データの具体的内容の薄さと質的データの客観性、サンプルの少なさを補う方法として、これまで質問紙調査と面接調査方法を組み合わせる体系的折衷調査法（大野、2011）などがあつた。しかし本研究では、伝記資料をこの体系・折衷的に取り入れる方法を検討している。これは学界でも全く新しい試みであり、一定の客観性、妥当性を示すことができている点は大変に評価できる。これからの研究の発展に期待した



い。

第3に、第5章で分析されているクリスティーが、幼少期は「親密群」の母娘関係から健康な自我発達のプロセスをたどっていたことに反して、中年期以降、夫との人間関係の形成に失敗している点を取り上げ、分析している点が評価できる。人格の生涯発達のプロセスを分析するための理論として多く取り上げられているエリクソンの漸成発達理論では、各発達段階の主題が「信頼 vs. 不信」のように、ポジティブなものとネガティブなものが対比される形で示されている。このため、エリクソン自身は、その両方を経験しその葛藤を乗り越えていくことは重要であると述べているにもかかわらず、多くの研究者が、ポジティブなものだけを経験、獲得し、ネガティブなものは経験、獲得しない方がよいと誤った解釈をする場合が多かった。これに対して本研究では、幼少期にネガティブな経験（不信の経験と獲得）をしなかったクリスティーが、中年期にいたって、そのことを原因として夫との人間関係の形成に失敗したプロセスについて考察している。この点はこれまでのエリクソン理論に関する解釈に新たな視点を導入する可能性を示したものであり高く評価できる。今後の理論的展開に関しても大いに期待できる研究といえる。

全体として、研究としては、まだ、情報不足、方法論的にさらなる検討が必要な部分は散見されるが、将来の展開を大いに期待できる論文といえる。

なお、本審査委員会は審査の過程で、本論文の完成度をさらに高めるために限定的な修正（説明の明確化）を求め、申請者はこの要求にもとづく修正を行った。

本審査委員会は本論文を総合的に判断し、その価値、意義および課題について検討した結果、本論文が期待される要求水準を十分に満たしたものであり、博士学位の授与に値すると判断する。